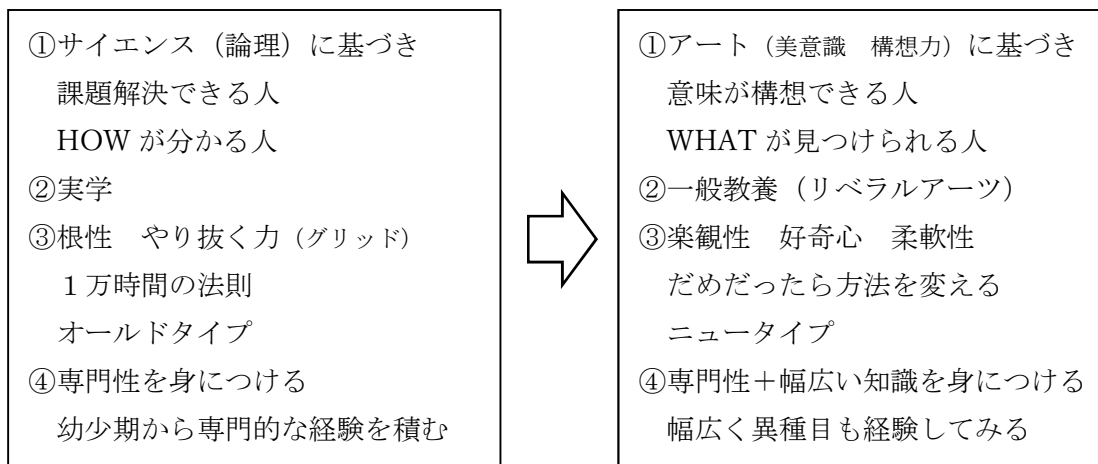




前回のふくろう通信では、現在進行している価値観の変化について説明しました。モノが広く行き渡り、「モノ>意味」となった社会では、過剰になった「モノ」の価値が低下する一方、人の心を動かす「意味」の価値が大きくなります。今回はこの価値観の変化が教育に与える影響について考えます。まず、次の図表は、それらをまとめたものです。

教育観の変化（求められる学習者像の変化）



①について

経済活動（ビジネス）は、消費者の価値観に訴える製品やサービスの開発競争ですから、意味に価値がある社会では、意味を作りだせる人材が求められます。モノに価値がある社会では、市場調査と分析というサイエンス（課題解決力）が有効でした。しかし、意味に価値がある社会では、その商品を購入することで手に入る意味（ストーリー）を提案しなくてはなりません。そこで力を発揮するのは、人間が何を美しく、あるいは善いと感じ、何に感動するかを判断する美意識です。このように、新たな価値観の中で、教育の重点は課題解決力の育成から美意識や構想力の育成に移っていきます。

②について

課題に対する正解を与えてくれる実学は、変化や競争の激化によって徐々に役に立たなくなります。すぐに役立つ学問は、すぐに役に立たなくなるのです。代わりに注目されるのが価値判断の座標軸を与えてくれる歴史や宗教、芸術、哲学などの一般教養（リベラルアーツ）です。これらの学問は人間を理解するための知恵であり、美意識を鍛えてくれます。最近、欧米では、社員をMBAではなく、美術系大学等に研修に送り込む企業が増えてきているそうです。このように、新たな価値観の中で、一般教養（リベラルアーツ）が見直されています。

③について

「グリッド（やり抜く力）」（アンジェラ・ダグワース著）という本が世界中で読まれ、大きな反響を呼びました。IQや才能でなく、「やり抜く力」こそ人生を成功へ導く最強の力であるという本です。「石の上にも3年」は似た意味のことわざです。「1万時間の法則」（1万時間取り組むと習熟度が高まり、直感が働くようになる）というものもあります。このような、考え方は魅力的で、私達に勇気を与えてくれます。

しかし、社会の変化や競争が激しくなる中、努力のし過ぎが、逆に足を引っ張るという見方が強まっています。努力がスキルを高めるのは間違いありませんが、努力した時間に比例してスキルが高まるかは取り組む分野によって違います。人生の時間は限られており、一つの道に固執することは、その他の機会を失うリスクとなります。コロナ禍のように大きな環境変化が起こり、途中で計画が台無しになるリスクもあります。このように今後、教育は楽観性や柔軟性、好奇心等を重視する方向に変化していきます。「多様なことに興味を持ち、いろいろ試そう。上手くいかなかったら、やり方を変えてみよう。成功は失敗から生まれるんだ。」という考え方であり、これはキャリア教育に大きな影響を及ぼします。（キャリア教育の変化については次号で説明する予定です）

④について

従来はその分野のスペシャリストになることが成功への近道でした。しかし、社会の変化や競争が激しくなる中、専門分野に加えて幅広い知見を持つ高学歴の人材が求められています。グローバルに活躍する人材には、複数の大学や大学院の卒業者も珍しくありません。専門分野に固執せず他分野の知見を用いて成功したり、専門外の人が成果を上げたりした事例も増えています。同様に、例えばスポーツや音楽などで幼い事から専門的な練習を積んだ人よりも、多様な経験を積んだ人の方が大成しているという研究報告もされています。このように、新たな価値観の中で、知識の幅（レンジ）が注目されています。（「レンジ」～知識の幅が最強の武器になる～ という本も話題を呼びましたが読みづらいので推奨しません。）

まとめ

新学習指導要領では、協同的課題解決能力の育成が強調されており、ここまでの文脈で言うやや時代遅れという事になります。しかし、話はそう単純ではありません。中学生の段階で、課題解決の経験を積み、基本的な手法を身につけることはやはり重要です。ただし、今や課題解決力の育成は最終ゴールではありません。私達教育者は、その先に新たな価値を構想する力の育成がある事を意識する必要があるでしょう。現在、欧米を中心に進んでいるこのような考え方は、少し時間をおいて、日本でも注目されていくと思われます。

リベラルアーツを重視しつつ美意識や構想力を育成する新しい時代の学びは、真に豊かな生き方を探す学びとも重なります。それを少し大げさに言えば、**第2のルネサンス**の始まり？ と言えるかもしれません。時代の節目に巡り会えたことに感謝したくなります。次代を担う若い先生方の活躍に期待しています。